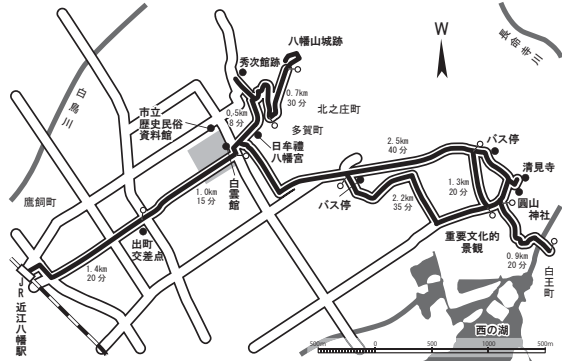


八幡山城跡

— 天下を継ぐ城 —



アクセスマップ

JR 近江八幡駅北口から近江鉄道バス①野ヶ崎行き公園前（図書館前）下車、徒歩約45分、
あるいは②市内循環線 八幡山ロープウェイ前下車、ロープウェイで山頂城郭へ

八幡山城跡へ登城されるみなさんへ

見学にあたっては十分な準備をして登山中、怪我の無いよう安全に努めてください。

城跡は大切な文化財です。また一部私有地も含まれています。マナーを守り、ゴミは自分で持ち帰るなどして、城跡の美化と保護に努めましょう。喫煙をはじめ、山での火の使用は止めましょう。

埋蔵文化財活用ブックレット12（近江の城郭7）
八幡山城跡

刊行：平成23年9月12日
編集：滋賀県教育委員会・近江八幡市教育委員会
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
住所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
電話：077(528)4674・FAX:077(528)4956
e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp
印刷：近江印刷株式会社



■ 目 次 ■

1. 羽柴（豊臣）秀次と八幡山城	1
2. 八幡山城の縄張りと構造	4
3. 秀次館の発掘調査	7
4. 八幡山城下町	13
5. ゆかりの社寺	
●日牟礼八幡宮	16
●願成就寺	16
●本願寺八幡別院	17

本埋蔵文化財活用ブックレットは、滋賀県教育委員会が国庫補助金（史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業費）を受け、近江八幡市教育委員会の協力のもと原稿を作成し刊行した。

表紙写真：江洲蒲生郡八幡町惣絵図（近江八幡市指定文化財、八幡町絵図第3幅）

■ 1. 羽柴（豊臣）秀次と八幡山城 ■

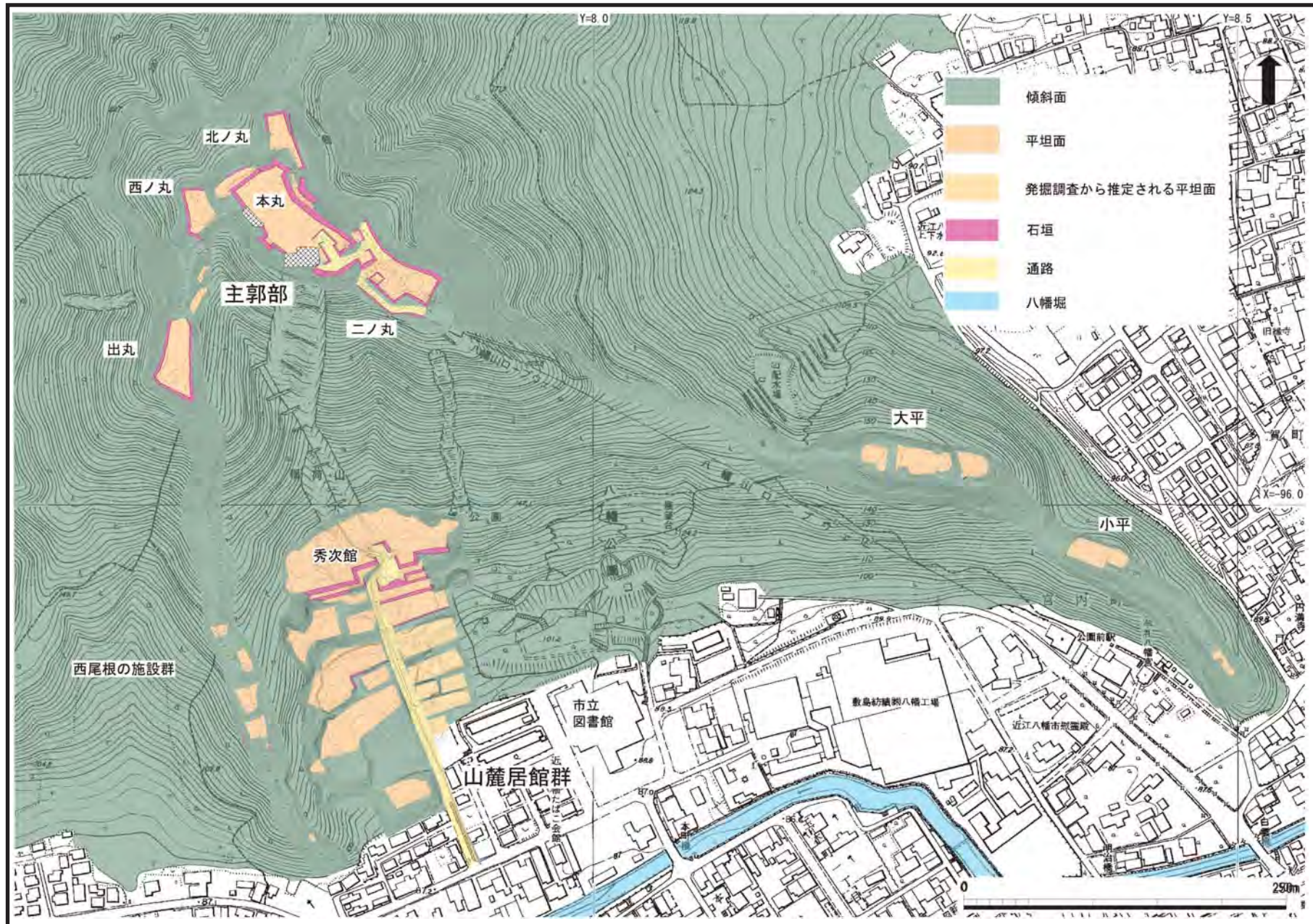
羽柴秀次は、羽柴秀吉の姉の子です。子が無かった秀吉の血縁者として、幼い頃から他の大名家に人質や養子に出されていました。後は、秀吉のもとで多くの戦いに参加し、武功をあげています。しかし、天正12年（1584）の小牧長久手の合戦では徳川家康の留守について本拠である三河岡崎を急襲する作戦を進言し、部隊の総指揮を任されましたが、逆に家康に作戦を察知され、池田恒興ら有力武将を数多く失って秀吉の叱責を受けます。天正13年近江湖東地域に43万石を与えられ、八幡山城主となりました。秀次は織田信長にならい、楽市楽座の掟書を出して城下町の振興を図り、現在にいたる近江八幡市の基礎を築きました。天正19年には秀吉より関白職を譲られますが、文禄2年（1593）秀吉に実子秀頼が誕生すると次第に両者の関係は悪化し、同4年謀叛を企てたという理由で高野山に追放され、切腹させられました。同時に秀次の妻たち30余人もまた、京都三条河原で処刑されました。粗暴な性格から「殺生関白」とも称される秀次ですが、八幡山城主時代から堅実な統治を実施していたことが明らかにされています。

八幡山城には秀次の後、京極高次が入りますが、秀次が切腹させられた文禄4年、廃城となりました。



八幡山城跡の麓に建つ豊臣秀次像

■ 八幡山城跡全体図 ■

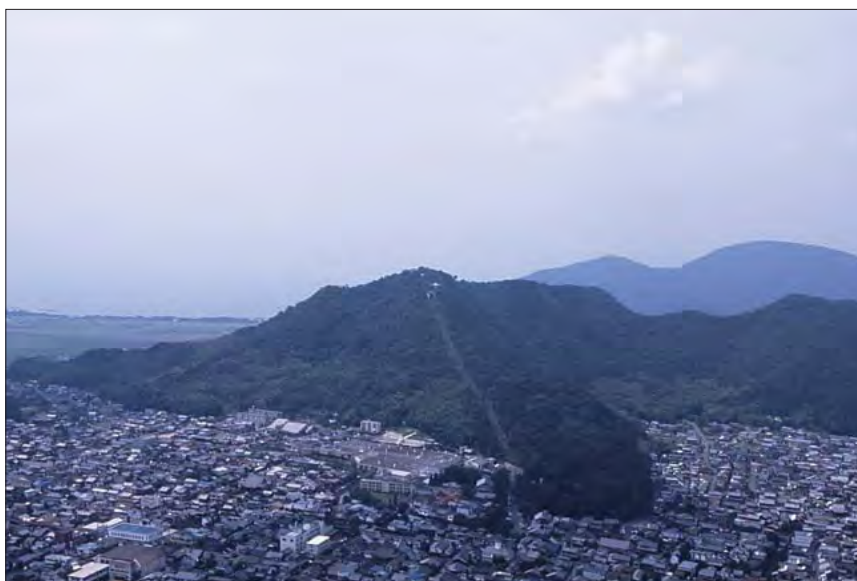


■ 2. 八幡山城の縄張りと構造 ■

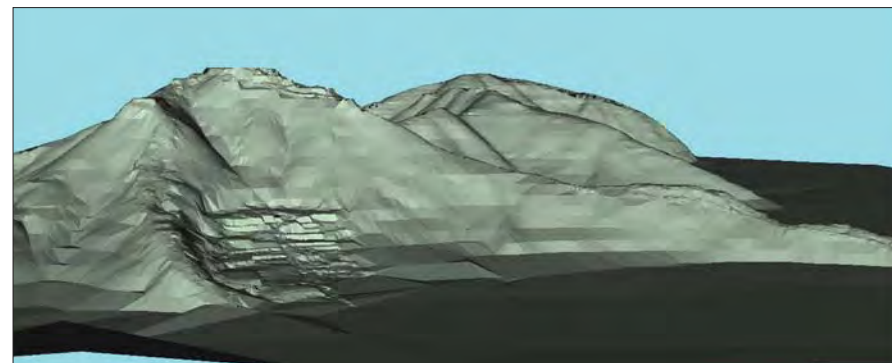
八幡山城の遺構は分布状況から見て、大きく四つに分けられます。一つは標高 285m の山頂本丸跡から放射状に広がる曲輪群、二つは西側の出丸から南に伸びる尾根上に存在する小曲輪群（西尾根の施設群）、三つは、二の丸から南東方向に伸びる尾根上の曲輪群（大平、小平など）、そして最後に、二つの尾根に挟まれた谷状地形に位置する曲輪群（山麓居館群）で、これらは八幡堀とともに惣構を構成していたと考えられています。

通常、中世の山城では堅堀や、堀切が存在しますが、総石垣で築かれたこの城では明確な堅堀、堀切は存在せず、搦手についても明確な遺構は存在しません。

一方で直線的に延びる大手道の突き当たりに館を配置し、その両側に家臣団の館群、堀を渡って町民の居住域である城下町が存在する近世的側面と、居館と主郭部が分離する



八幡山城遠景（空中写真）



八幡山立体モデル画像



八幡山城二の丸虎口

中世的側面が同居しています。

山頂の主郭部は二の丸下の側面を通過して二の丸虎口に至ります。この虎口から本丸に入るまで都合五回にわたって屈曲させています。これに酷似した虎口形状をもつ城として三重県熊野市赤木城があげられます。

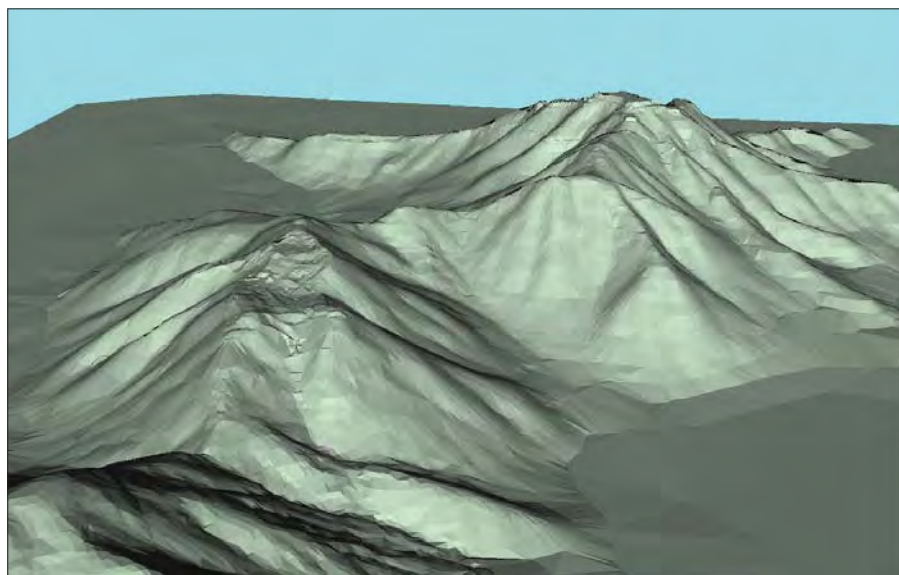
なお、本丸の西側斜面は昭和 42 年の集中豪雨により斜面が崩壊し、石垣の一部が破壊されました。

北の丸では北東側で一部の石垣が入り口状に 2 段築成されています。西の丸南側斜面、西の丸の上段では石垣の一部が崩壊しています。現在二の丸から西の丸へ道がついていますが、斜面が崩壊していることもあって、当時からのものかどうか明らかにできていません。

出丸から南に延びる西側尾根上の諸施設には中世墓や平坦地が存在し、石垣に石仏が利用されている中世寺院の墓地群と重複しているものと考えられます。

東側尾根の中腹以下には大平・小平と呼ばれる平坦地が存在し、築城に伴って下社に合祀された日牟礼八幡宮の上社との関係が想定されます。

八幡山城の北側ピークには佐々木六角氏の支城として知られていた北ノ庄城が存在しますが、詳細な測量調査の結果、中世的色彩の強い山頂の半町（約50m）四方の曲輪以外に大規模な堀切や虎口が確認でき、八幡山城跡と有機的な関係が想定できる状況となりました。なお、この城の名称は字名と史料に出てくる名称を合わせて、深谷・岩崎山城と称することにしました。



深谷・山崎山城跡と八幡山城跡立体モデル画像

■ 3. 秀次館の発掘調査 ■

秀次館は、山頂から八幡堀に延びる二方の尾根に挟まれた谷部に存在します。直線的に延びる大手道の両側に短冊形の曲輪を配置し、その最奥部に大型の石を用いた石垣を積んで、約6000㎡の平坦地を作り出しています。

館本体の建物は平坦地のやや西寄りから確認されています。斜面崩落土の堆積が著しく全体のプランは把握できていませんが、礎石列は南北を軸にすると22度ほど西に傾いています。礎石は42個が確認され、大きいもので一辺60cmほど、小さいもので一辺30cmほどの大小2群に分けられ、小さいものは床を支える束柱と考えられます。柱間は基本的に2m間隔に並びますが、西端だけは1.1m間隔とほぼ半間になり縁が作られていたとみられます。おそらく書院造りの建物でなかったかと考えられます。



検出された礎石建物跡

秀次館には大量の瓦が堆積し、さらにその上に堅く叩きしめられた粘土が、館跡を覆い尽くすかのよう堆積していました。その大量の瓦の中からは金箔瓦が多数出土し、秀次の馬印である沢瀉を図案化した金箔瓦も出土したことから、当該地が秀次館であることが証明されました。

この秀次館から出土する軒丸瓦の三巴紋は1種類のみで、粘土塊から瓦素材となる粘土板を切り出す技法も大量生産が可能なコビキBだけに限られます。金箔瓦は軒丸瓦、軒平瓦、飾瓦、熨斗瓦と多種におよび、豊臣系の金箔の使用方法を特徴づける凸面に貼られ、軒丸瓦と軒平瓦が重なる部分は金箔貼りを省いていることがうかがえます。

そして、このことを山頂の主郭部から出土する瓦と較べてみると、主郭部出土瓦は大きさも紋様も多種多様で統一



秀次館の石垣



秀次館出土金箔沢瀉（おもだか）紋飾瓦

性を欠き、コビキ技法も一段階古いAであることから、安土城跡などの瓦を集めて再利用したとも推定できます。それに対して、秀次館出土瓦は、秀吉が大坂城築城中の瓦工人を編成し、製作させたというようなイメージで語る事ができそうです。



秀次館出土金箔軒丸瓦・軒平瓦



秀次館出土金箔飾瓦

角材の先端を飾る金具を模しており、他に類例をみません。一辺17.6cmで、釘穴5個があげられています。



密教法具六器

秀次館とその家臣団屋敷の空間配置、つまり大型の平坦地（秀次館）の前面に直線的な道が延び、その両側にひな壇状の平坦地（家臣団屋敷）が展開するという構造は、中世寺院の空間配置（本堂と子院の配置）とよく似ています。

そもそも八幡山には4ヶ寺の天台系寺院の存在が知られており、秀次館周辺ではこれまでも仏華瓶などの出土が知られています。また、大手道東側の平坦地の調査では、密教法具の六器の台皿や瓦質の香炉蓋などが出土し、中世の石垣が検出されました。発掘調査でみつかったこれらの遺構や遺物は、築城時に移転させられたと記録に残る願成就寺の一部であった可能性があります。



中世の石垣（左側トレンチ内の石列）と八幡山城の石垣（右側の石垣）

ます。秀次館とその家臣団屋敷の平坦地は、寺院跡地の平坦地を拡大・補修して造成されていったと考えられます。

秀次館と家臣屋敷での土層の堆積状況を観察すると、まず館が廃絶した後、瓦を敷き詰め、粘土で叩き締めた状況がうかがわれます。その後、長期間をかけて腐葉土が堆積したあと、その上に大きな崩落土が堆積し、また、腐葉土が堆積します。そして、さらにその上に昭和42年の崩落土が堆積している状況が認められます。

昭和42年の集中豪雨では、本丸直下の斜面が崩落し、その大部分は秀次館で受け止められたものの、大手道が残り崩落土を落とす道になってしまいました。また、ひな壇状の平坦地のうち、大手道の東側が西側に比べて一段低いことが崩落土の堆積状況からも証明できます。

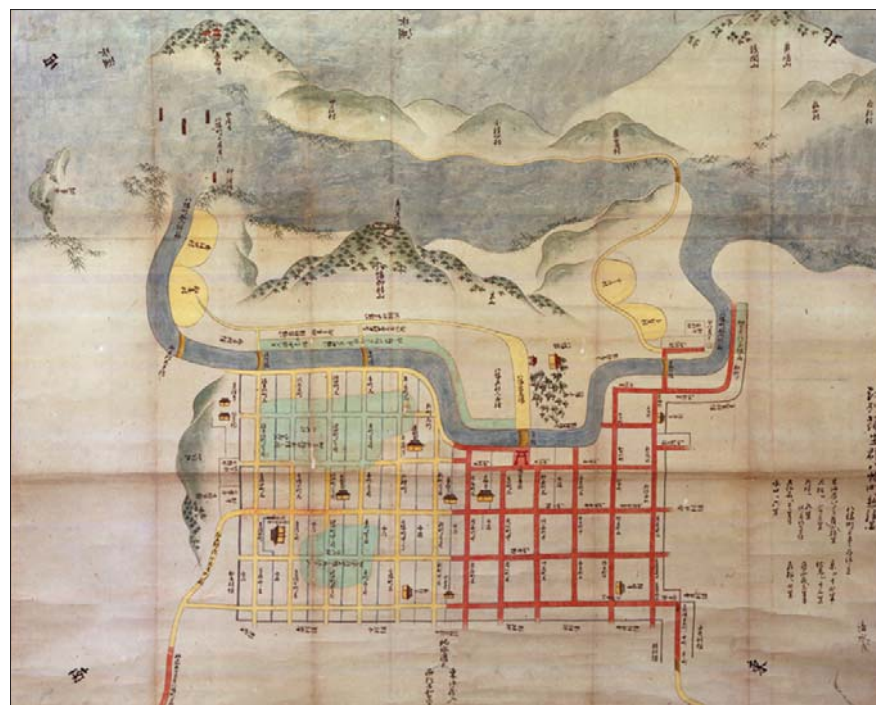


秀次館の土層堆積状況

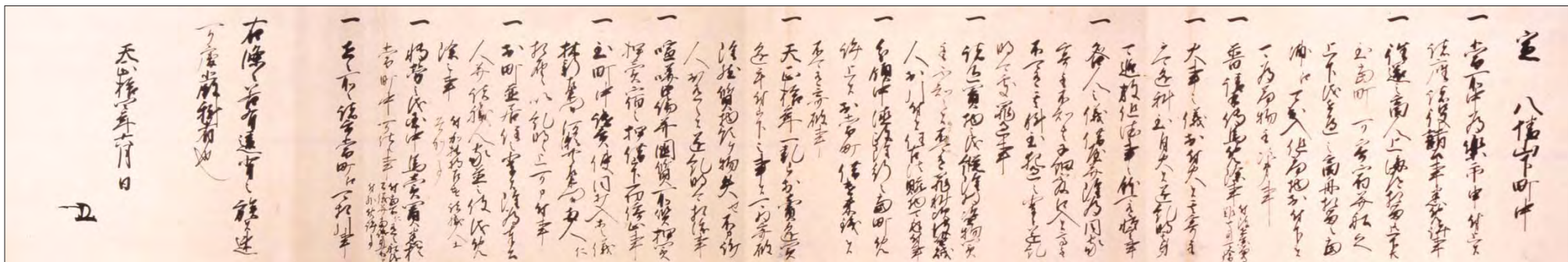
■ 4. 八幡山城下町 ■

城下町は縦12筋、横5筋の碁盤目状に町割りされ、八幡堀によって城と隔絶されています。八幡堀は東を北ノ庄沢から西の湖へ抜け、西を津田内湖から琵琶湖へ抜けるように掘られています。

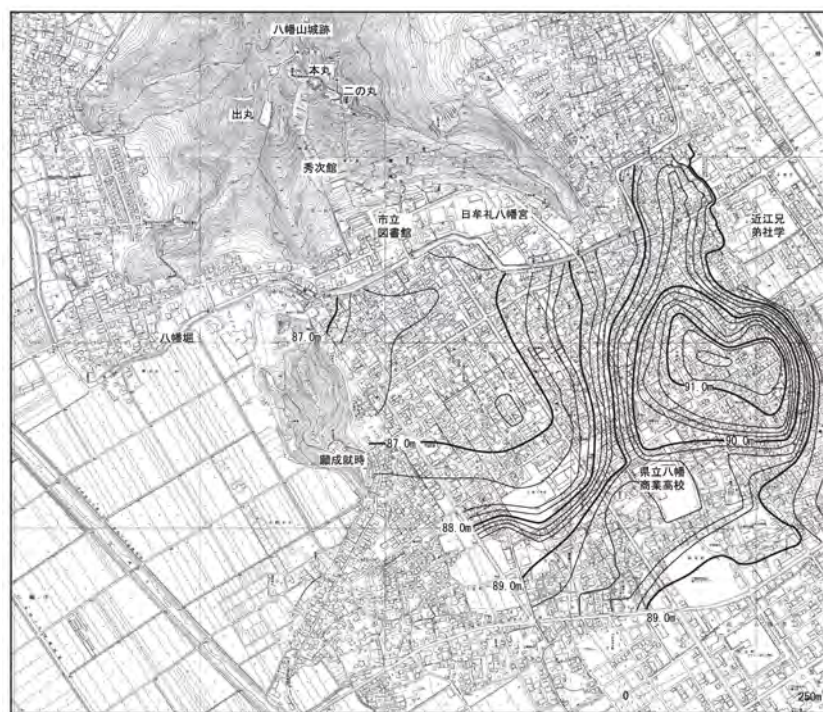
城下町は築城と併行して建設されたと考えられていますが、いつ頃に完成したのかは、城の完成と同じく、明確に記述された史料が存在しません。ただし、天正14年(1586)6月に出された城下町に対する掟書きには、街道の往来だけでなく、琵琶湖を航行する船舶にも八幡浦への寄港を命じていることから、この時までには八幡堀の整備が完了し、町としての機能を果たしていたと考えられます。



江洲蒲生郡八幡町惣絵図（近江八幡市指定文化財、八幡町絵図第3幅）



安土山下町中掟書附八幡山下町中掟書（重要文化財）



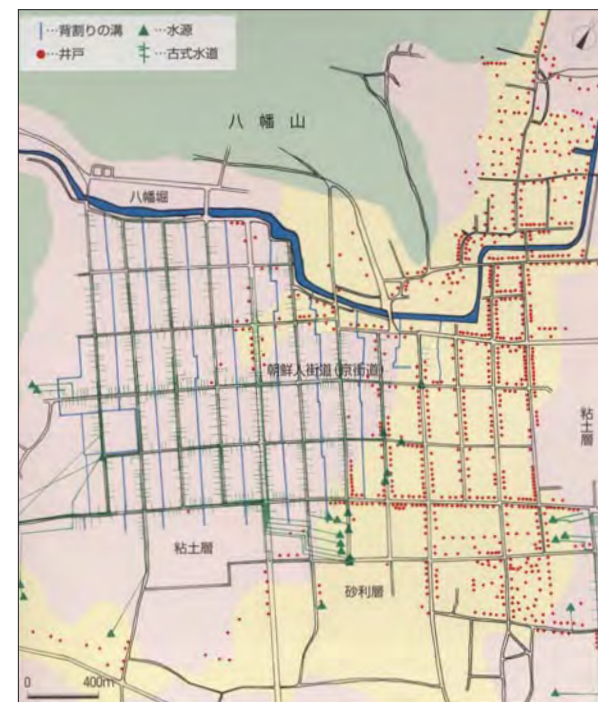
八幡山城下町の地形

城下町の地形図に 25 cm ごとの等高線を引くと、城下町東側の永原町上付近に最高所があります。これを西側の町の最も低いところと比べると、約 5 m の高低差があることがわかります。

こうした 5 m の高低差は地質環境ともかわり、西側の町は粘土層で、井戸水は鉄分を多く含んで飲料には適しません。そこで、東側の町の砂礫層から湧き出る井戸水を枕木でつないだ竹管で西側の町へ送り、各家庭に設けられた井戸までサイホンの原理で運んできました。

また、土地が低い西側の町では低湿地対策として宅地の裏側に、背割水路が掘削されています。

なお、この古式水道と背割水路が城下町建設当初から整備されていたのかは明らかにできていません。



八幡山城下町における古式水道・背割水路の分布状況

■ 5. ゆかりの社寺 ■

● 日牟礼八幡宮

鶴翼山南麓の八幡堀の北側に位置します。寛弘年間(1004～1012)の創建と伝え、山上にあった上社が、築城と同時に山麓の下社に合祀されたといわれています。3月中旬



日牟礼八幡宮

に行われる左義長や4月15日の例大祭の宵宮(ともに県選定無形文化財)は多くの人で賑わいます。また、祭神四体の木造神像(いずれも鎌倉時代の作)と、江戸時代初期に海外貿易で活躍した西川太郎右衛門が奉納した安南渡海船額は、国指定の重要文化財になっています。

● 願成就寺

鶴翼山南方の日杉山南東斜面中腹にある天台宗寺院です。当初は鶴翼山南麓にあって、日牟礼八幡宮下社の神宮寺でしたが、八幡山城築城にあたり現在地に移転しました。本尊の木造十一面観音立像(平安時代作)と木造地藏菩薩立像(鎌倉時代作)は重要文化財で、このほかにも多くの什物を伝えています。



願成就寺

● 本願寺八幡別院

織田信長によって安土城下に建立された寺院を、八幡山築城にともなって現在地に移したものとされています。浄土真宗本願寺派。近世には本山直轄の八幡御坊と称され、近江の触頭として末寺統制を行っていました。また、朝鮮通信使の本陣としても利用されています。本堂、表門、裏門、鐘楼の四棟が、近世の真宗建築を代表するものとして県指定文化財となっています。



本願寺八幡別院



八幡山城跡・城下町跡周辺